



町民C、勇者様に
拉致される 4

つくえ

Tsukue

Regina



レジーナ文庫



登場人物
紹介



▲ 神様

この世界を創った
神様。



▲ 白の大神官
(幽霊さん)

姓の星術を編み
出した人物。今は幽霊。



▲ 華姫

第一王女。
おしゃれと噂話にしか
興味がないように
見えるが実は策士。



▲ 魔王

始原の勇者が瘴気を
自分の体に集めて、
竜となった姿。



▲ テルル

幽霊から実体に戻った
町民Cが会った迷子
の女の子。



▲ 勇者

町民Cを連れ、魔物退治の
旅をしている。
とても強いが、無表情な男。
深蒼の勇者。



▲ 神官

勇者とは幼馴染で、
ともに旅をしている。
博識で美形、
実はとっても偉い大神官。



▲ 町民C

元・平凡な一庶民で、勇者たち
と出会い、今は「神子」と呼ばれ
ている。実は世界を管理する
星原樹だった。

1 私、もう一度世界の中へ

久しぶりの地上です！

ただいま、私の体！

けれど、目を開けたら、真っ暗でした。

「ふおっ！」

驚きすぎて変な声が出ましたよ！

あまりにも真っ暗なので、ベッドの上で硬直しました。え、目覚めるのが久しぶりすぎて、本当はちゃんと目が開いてないとか？ いやいや、それは間抜けすぎる展開ですよ。そういうえば、寝すぎたら目が溶けるんだよって、向かいのおじいちゃんが言っていました。ま、まさかね。試しに閉じてても真っ暗です。まあ、当たり前ですよね。落ち着くために深呼吸。胸いっぱい冷たい空気を吸い込む感覚が、なんとも新鮮です。次に手をにぎにぎして、確かめました。よし。きちんと足も動くみたい。私の動き

に合わせてシートが立てる衣擦れの音も聞こえます。大丈夫。

「よいしょ」

ちよつとアレな掛け声をかけながら、身を起こしました。でも、掛け声といったらこれだよな。

それにしても本当に何も見えません。のっぺりした黒が広がっています。

むむ。いやあ、ここまで暗いのって初めてかも。ちよつと涙目です。暗いと幽霊とか出そうですね！ 出ないでください、怖いからっ。自分も一時期幽霊だったけど、根本的に駄目なんだよおおお！

そして、私はようやくくひらめきました。明かりがないなら、作ればいいんだ。

世界に怪しい霧が満ちています。これの正体を確かめに地上に戻ってきたんだけれど……星術に反応して、何かまずいことが起きたりしないよね？ 怖いのでちよつとだけ術を使ってみます。

「chvvvxxxxxxhvvvkkxxrvvv w0 !0nshvvmxxxxsw/」

——小さな光を灯します。

私が想像した通りに、親指の爪ぐらいの光が顔の横に灯りました。できた！

神子だった時もこんなことができたなら、足手まといじゃなかっただろうな。過ぎたこ

とを悔やんでも仕方ないですが。

灯した光で、自分の格好を眺めます。どうやら幽霊になった時と、同じでした。髪は解いたまま、着ているのはネグリジェと下着だけです。ばたばたとネグリジェの上から触って確かめました。下はちゃんと穿いていますが、上……何も着けていません。まあ、着けなくてもさほど支障はないですけどねっ。

「つくしゅん！」

久しぶりのくしゅんが出ました。それにしても寒いです。太陽が霧で隠れている弊害（へいがい）かも。さすがにこれじゃ恥ずかしいですから、普通の服を借りたいなあ。本格的に着替（か）えが必要だけど、部屋の近くには誰もいないようです。耳が痛くなるぐらい静かですよ。仕方がないので、私は寝台からシートを剥ぎ取りました。それをぐるぐると体に巻きつけて、簡単に防寒対策します。まさにシートお化け状態。見た目がダメダメですが、寒いんだもん。誰か探すにも、部屋から出なきゃいけないみたいだし。

なにか履くものはあるかな？ 床を照らして探したけれど、何もありませんでした。ですよねー、いつ起きるかわからない爆睡している人の横に、靴なんて置かないよね。掃除の邪魔です。

けど、裸足で徘徊（はいか）するのって、寒い上に足の裏も痛いよね。もう少しだけ、術を使っ

でも大丈夫かな？

「wxxxxxxxshvvhxxx s0fxxxxw0 xxxrwwkvvmmxxxxsw」

——私は空を歩きます

最後に終わりの音を付けずに、韻律を紡ぎます。星原樹となった私には対価に差し出す存在値だけはたっぷりあるから、私が終わりを宣言するまで術は続いていくはず。寝台の端っこから、こわごわと下りました。

足裏には何も感じません。よし。浮いていることを確認しました！これで常に空中散歩状態です。ただし小指の爪半分ぐらいの高さだけ。飛行術のわりに、しょぼいですが。部屋をぐるっと一周してみます。部屋は、幽霊になったあの日にいたのと同じ部屋だと思えます。けど、暗いからものすごく雰囲気の違いですね。暗闇の中、一人だけ世界に取り残されたような不安が湧いてきました。

小さな明かりの下で、私は改めて自分の手を見下ろします。今は、星原樹本体とはほとんど接続していません。樹はあらかじめ決めてきた手順に従って、勝手に再構成をしているはず。寝てても肉体が呼吸するのと同じです。星原樹の能力は、この「人の器」では上手に行使できません。星原樹と比べたら、あまりにも微々たる存在の人間としての私。

普通は不安になりそうですけど、逆に私は安心していきます。

手のひらで物に触れる感触。肌を滑る布の柔らかさ。頬を撫でる空気のキンとした冷たさ。

それらは、星原樹だった私が、ずっと望んでいたこと。小さな体だけれど、これでいっぱい世界を感じることができます。世界の中に存在できる、それがたとえようもなく嬉しいんです。

ああ、生きてるんだなあって。

その瞬間、周りがふわっと温かくなった気がしました。日向ぼっこしているような、ほわほわした温もりに包まれます。

ビックリして周囲を見回せば、原因はどうやら世界に満ちている謎の霧でした。今、これは私の感情に反応したみたい。しあわせなら温かくなる。じゃあ、他の感情なら？私以外の人の感情でも動くのかな？しあわせならいいのですが、変な使われ方でもしたら——じわりと焦りがこみ上げます。早くほかの人を見つけて、検証しなければいけません。久しぶりの肉体にドキドキして、ここに来た理由を忘れそうになっていました！世界の中に入った理由は、この謎の物質が何かを調べること。そして、今、何が起こっているかを見極めること。

よし、ちゃんと覚えていきますよ。危ない危ない。鳥頭の星原樹とか、洒落になりませんよ。とにかく、ここから移動しなくちゃ。

私はシートを歩きやすいように巻き直し、扉を開いて、外を覗きました。長い廊下は、闇の中では終わりがないみたいに見えます。私は恐る恐る部屋の外へ歩き出しました。すぐにシートがずり落ちそうになるから、手で強く握りしめました。人の気配は全くありません。まるで廃墟みたい。いやな想像に、じわりと汗がにじみました。世界に私一人とか、そういうことないよね？

その瞬間、見えない柔らかない膜に触れました。

ん？ なんだろう今の。思わず振り返ります。膜と思ったのは、結界でした。その術に触れてみると神官様の気配がします。懐かしさで、ジワリと涙がにじみました。今の私には、この結界がすごいってことがわかりました。とんでもなく精緻な結界ですよ。私だったら作れと言われた時点で、涙目で断ります。改めて神官様の才能に驚かされますね。つくづく、凄い人と旅したものです。

でもなんでこんなところにも？ 大事なものとかな無さそうな区画なのに。

触れて術を解析してみたら、結界の中心は私が寝ていた寝台でした。まさかこの結界は、私が爆睡していたから設定してくれていたもの？ それ以外に考えられない配置と条件

付けです。ありがとうございます、神官様。思わぬところで触れた人の優しさに、しあわせ度が上昇します。一人じゃないって、こんなに嬉しいことだったっけ。私の感じた嬉しさに、謎の霧も反応して、またふんわりと温かくなります。

星原樹として、さっきまで存在していた空の中。あそこは、地上に慣れた私には寂しい場所でした。これが終わったら、私はまたあそこに帰るのかな。……少し、寂しいな。私は再度歩き始めました。

誰もいない建物って、本当に怖いんです。誰かいませんかー！ あまりの人気のなさに、だんだん涙目になってきました。私は小走りですまよい続けますが、きれいさっぱり誰もいません。幾つも扉を開いたけれど、収穫ゼロ。みんな、どこへ行ったんだろう？ ずーんと体が重くなったような気がします。謎の霧が怖くて小さな光にしたけど、もつと大きな明かりを作ればよかったかな。周りが暗いから落ち込んでしまっただろうか。今更ですがちよつと後悔ですよ。あわてて体に入る前に、星原樹の能力で、もう少し周囲のことを読み取っておけばよかった。星原樹になっても、相変わらずうつかり者です。

少し諦めかけた時、廊下のすみっこから声がすることに気がつきました。人の気配に大声をあげそうになって、反射的に口を押さえました。探していたけど急に暗いところで人と会ったら怖いですよ！

ビクビクしながら、声をする方をそっと覗いてみます。

「つく、えつく……おかあさん……」

小さな女の子です！ うずくまって泣いているみたい。泣きすぎたのか、しゃっくりまで出ていました。

おおお！ 人間発見！ でもこんな暗がりには女の子？ しかも幼児が一人です。まさか幽霊じゃないよねっ。思わずびくついちゃいます。じっと観察して、幽霊じゃないことを確認しますよ。ごめんね、すぐに声をかけられない私を許してください……

私に気がついた女の子が、びくっとして顔を上げます。目が合って、私もびくっとしてます。

次の瞬間、女の子が叫びました。

「おばけえええ！」

はっ、しまったあああ！ 今の私の格好を思い出しましたとも！ シーツをグルグル巻きにした、裸足の、不審な女！ 全体的にぼやっと白くて弱々しい光を受けているさまは、まさにシートお化け！ どう見ても幽霊ですよ。幽霊を警戒しながら、自分が幽霊に見えたら意味がないよね！

「違うよ！ 大丈夫！ これはただのシートだから！」



女の子は驚き過ぎたのか、しゃっくりも止まった様子。しゃっくりつて、地味に辛いですね。

女の子はちよつと後ずさりながら、私を上から下まで眺めました。完璧に怯えられています。うつ、そんなに見ないでください。すごい罪悪感がっ。

「……なんで、シート巻いてるの？ へん」

あああああ。幼子の容赦ない一言に、私のハートはずたほろですよ。率直な感想って、こんなに辛いんですね！ 私は目をさまよわせながら、言い訳にもならないことを言います。

「寒いから……巻いてるんだよ」

とりあえずそれだけしか言えません。それ以上でもそれ以下でもないしね。

「ふうん」

女の子は私の横に浮かぶ明かりを見て、不思議そうにしています。私はそれを、女の子の近くに持っていました。考えるだけで、この先は動かせるんですよ。女の子は光を捕まえようとして手を伸ばすけど、空振りします。光の塊だから、すり抜けるんだよね。とりあえず泣き止んでくれてよかったけど、どうしよう。

「光虫さん？」

「ううん、それはただの明かりだよ」

女の子は何度も果敢に光を掴もうとチャレンジします。うう、私が空気になった感が満載です。

「ところで、他の人はどこにいるか知ってる？」

私の問いかけに、女の子がやっとこちらを見てくれました。そのほっぺたが、涙でべたべたになつてることに気がつきます。

「お顔、拭いていい？」

「うん」

シートの端っこで顔を拭いてあげます。そしてさっぱりしたところで、女の子が衝撃の一言。

「お姉ちゃんも、迷子なの？」

あえて避けていた単語を、ずばっと出されました。確かにその単語に当てはまる状況ですがっ！

「……うん、迷子だよ。だから、一緒に帰ろう？ どつちから来たか覚えてる？」

事実を認めることも、大人への一歩だと思うんですよ……。いや、とつくに大人ですが！ たぶん！ 女の子が私をじっと見て、はっと何かを思い出したような表情を浮か

べました。

「知らない人についていっちゃいけないって、お母さんが言った！」

そうです、私は知らない人です。ついていっちゃ、いけないよね！　こんな小さい子でもちゃんと警戒するんだ……かつての自分の行動が心に突き刺さります。フフフ……勇者様神官様ごめんなさい。色々。

困る私と警戒する女の子。二人で、しばらく無言のにらめっこをします。ち、沈黙が痛い。でも、ここでにらめっこしていても仕方がないよね。この子のお母さんだって探しているかも。

「それじゃあ、誰か人を呼んでくるから、ここで待っていてね」

「いやだあ！」

女の子がぱっと立ちあがって私の足にしがみつきました。うっ、歩けない。

「じゃあ、私と一緒に行く？」

「仕方ないから、ついていってあげる」

頼もしいお返事だけど、しがみつく手がちょっと震えていました。それでようやく私は大失敗をしそうになっていたことに気づきます。そうだよ、こんなに暗い中、一人ぼっちじゃ怖いよね。

「抱っこしていい？」

「うん」

女の子は両手を伸ばしてくれました。膝を落として、首に手を回してもらって、抱き上げます。私より体温の高い小さな体が、べったりとくっつきました。そして女の子を抱えて立ち上がります。運べそうな重さだったから一安心！　腕力が弱いので心配だったんだ。疲れたら、こっそり補助の星術せいじゆつを使おうかな。

「どっちから来たか、わかる？」

女の子は首を横に振りました。だよ、こんなに真っ暗だし。私はとりあえず、そのまま先に進むことにしました。服越しに女の子の体温を感じて、ああ、生きているんだなあって実感します。

少し歩いても、誰もいません。どうしようかな。その時、女の子が欠伸あくびをしました。しきりに目を擦こすっています。泣き疲れたみたい。

「寝てもいいよ」

そう告げたら、プライドが刺激されたのか、

「お姉ちゃんだけだったら、もっと迷子になるもん」

ときました。あながち間違いいはないのが、悲しいところです。私は、ふと思いついて、

「お名前聞いてもいい？」

と聞きました。私は名前を呼ぶだけで相手を支配してしまいます。うっかり名前を呼んでしまうといけないから、普段は絶対聞きません。けれど、人から呼びかけられるということは、寂しさを紛らわせます。だからあえて聞いてみました。頑張つて耳を澄ませて、覚えます。

「テルル」

「じゃあ、えーと……」

とはいえ、星原樹が呼ぶわけにはいきません。ニックネームだったら大丈夫だと思っただけ……ネーミングセンスにはかなり自信がありません。以前、陸馬さんに名前をつけようとして、勇者様に本気で止められたのを思い出しました。あの勇者様が強い口調で止めるんですよ！ 神官様は個性的ですねって放任主義っぽいコメントを残していました。下手なニックネームは止めておいた方がいいよね。だから名前からちよつと取ります。

「ルルちゃんって呼んでいい？」

本名全部呼ばないための苦肉の策ですよ！ 女の子は顔うなずいてくれました。よかった！ じゃあ心の中でもルルちゃんって呼ぼう。ルルちゃんは私を見上げました。

「お姉ちゃんのお名前は？」

返す言葉は、今はありません。当たり前前まへのやり取りが、私にはできないんです。

「今は名前を探している途中なんだよ」

なんだか胡散臭うさんくさいなど自分でも思いつながら発言すると、ルルちゃんが難しい顔をして、「青春なんだね……」

としみじみ眩つよきました。そうか、これが青春？ でもルルちゃん、その知識は一体どこで……

ルルちゃんは強がっていましたが、しばらくするとすうつと眠りに落ちました。眠っている子供って、ぼかぼかします。あの霧が、私の感情に影響を受けて伝えてきたあつたかさも、これに近い感じ。そういえば、この霧、泣いているルルちゃんには反応しなかった。この違いはなんだろう。感情の種類を、霧が判別している？ でも、霧自体に意思はなさそうだし。とすればやっぱり怪しいのは、行方不明の始原しりょうですね！ あの子はどこで何をしているんだろう。星術せいじゆつで検索しても見つかりません。相変わらず私の術は制限されているみたいです。

そんなことを考えながら、ぼんやり歩いていたのですが。

突然、ぱつ、とまぶしい光が当てられました。目がくらみます。うひゃあ！

「こんなところで、何をしている！」

男の人の声でした。何人もの足音が響きます。おお、とうとう人に出会った！ けどまぶしすぎて目が痛いです！ うう、目がつぶれる。ようやく光に目が慣れた時、飛び込んだきた光景に、ドツと冷や汗が出てきました。

私、なんで騎士様たちに包囲されて、剣を向けられているんですかああああ！

私を作ったのとはだいぶ大ききの違う光に照らされて、くらくらしみます！

展開についていけず、目を白黒させていると、

「ここは現在封鎖されている。どこから侵入した？」

と偉そうな強面の騎士様こゝろもちが、私に問いかけます。

こ、これが本当の尋問！

神官様に怒られる時とはまた違った恐ろしさですよ！ うん、そりやあ違うよね！

神官様との間には、一応信頼関係があったし。今は疑惑しかないですよつ。どう見ても不審な、シーツグルグル巻きまきの幼児誘拐犯ですね！ 大変です、前科がつきそうです。

「答えろ！」

私が頭を真つ白にしていた間も、詰問きつもんは進んでいたようです。背中にも、剣が突きつけられているのを感じました。嘘を言っても仕方がないので、現状をお話しします。

「もともと建物の中にいました。侵入はしていません。ここまでは、向こうから歩いてきました」

私は正直に答えたのですが、やっぱり信じてもらえないみたいです。ですよねー。全方向から見ても、きっぱりはつきり私は不審者だと言えると思うよ。うん。

喉に鋭い痛みが走ります。

喉に当てられた剣の先が、少し皮膚を傷つけていますよ！ 地味に痛いんです。針で刺

されたような感じでかなり痛いんですがあああ。

ルルちゃんに剣が当たらないように、ぎゅっと抱きしめます。無詠唱せいじょうで星術せいじゆつを使う方法はあるけど、大規模すぎるし、今は謎の力が満ちているからもしやったら何が起こるかわかりません。と言うか、抵抗したら泥沼化しそうですけどね！ うわーん。

「ここは三日前から全員退避の命令が出ている。嘘は止めろ」

鋭い声が飛びます。え、全員退避ですか。知りませんよそんなこと！ 連絡できなかつた人には、回覧板でも置いておいてくださいよ。というか、私は三日放置されてたんですね……

「さっき起きたから、知らなかったんです」

「三日も寝る人間などいるか！」

騎士様の突っ込みが冴える！ いや、突っ込みじゃないですね。

うーん、どう考えても信じてくれそうにありません。空気中の敵意成分がグングン上がっている気がするよ！

「すみません、五十日近く寝てましたっ！ 寝過ぎだつてわかってます！ その、日にちの感覚が吹っ飛んでいましたっ」

「何を馬鹿みたいなことを言っているんだ！ 正直に答える気がないのであれば、もういい」

尋問は終了のようです。いや、色々と冗談かなーって思うぐらいのことが現実で起こっちゃってるんですよ最近。現実の方が冗談よりひどいです。全部冗談ならよかったんだけどね。

「武器を持っていないか身体検査をして、連れていけ」

「はっ」

偉い人の命令で騎士様が剣を引くと、私の首から何かが流れた感触がしました。むっ。血が出ちゃってます。そつと傷口に触れると、既に塞ふさがっていました。さすが星別者せいべつしや、驚異の回復力ですね。つまり、勇者様とおそろいなんです！ でも痛いのかは苦手だから、あえて怪我けがをする勇者様の行動は、全く理解できません。血はこっそりシートで拭きます。

「う……………」

今の騒動でルルちゃんが身じろぎしました。この子も大物ですね。この状況で起きませんでした。ビックリだよ。私以上の睡眠力です。

「その子を渡して、おとなしく手を壁につけてください」

背後にいる騎士様はまだ剣を下げていません。軽く剣先を押しあてられました。シートに穴が開きそうです。もつたいないよ、これ絶対高級シートですよ！ あ、でもさつき血を拭いちゃった。お洗濯して、返さなきゃ。

私はルルちゃんを、隣の騎士様に預けました。受け取った騎士様は、危なげない手つきで抱っこします。おお、抱き方がさまになっている。この子のお父さんぐらいの歳の人だから、子供がいるのかもね。

ルルちゃんが目を擦こすりながらぐずったけれど、

「寝てていいよ。騎士様が迎えに来てくれたから」

と言いつけると、相当眠たかったのか、すぐにまた夢の中に旅立ちました。迎えに…………というよりは、連行に、だけどねっ。言葉のあやつてヤツです！

騎士様に促されて、壁に手をつきます。武器という以前に、何も持っていません。靴もありませんよっ。押さえていた手が離れて、シートが足元にばさつと落ちました。冷

たい空気にトリハダが立ちます。寒い！ 思った以上に寒い！ くしゃみが連発で出ました。

周りのみんなが目を丸くして驚いています。さっきの偉い人も、驚いてますよ。シーツの下はまさかのネグリジェですから！ しかも裸足はだし。この寒さで。まさにクレイジー。いやあ、自分でも結構駄目な格好だと思いますよ！ だからシーツを巻きつけていたんだよ！ ……その選択が逆に駄目だった？ 不審感をあおってましたか？ あいかわらず残念な私です。

でもそれよりも大きな問題に気づきました。

上に着ける下着……無くていいかなって思ってたけど、今まさに大変なピンチです！ 所持品検査で体パンパンとか……触られたら着けてないのが一発でバレますね。しかもこの服で触られるのかなり恥ずかしいんですが。ダイレクトに、その、感触が……ね？ いや、お仕事だというのはわかるんですけど、恥ずかしいのと怖いのとで涙目になります。騎士様たちの動きもかなりぎこちなくなりました。正直、誰も動きたがりません。あねさんみたいな女性の騎士様はいませんでした。「お前行けよ」「いやだよ」という無言の攻防が繰り返られています！ ですよねーいやですよねー。私も恥ずかしいです！ どちらにしても、何も持っていないのははっきりしてるんじゃないで

すか。する必要あるの？ 隠すとしたら、パンツに挟むぐらいですよ！ つまり、無理ですってば。

「なんでそんな格好をしている！」

偉い人が逆切れました。え、私が悪いんですか？。今までせつかくおとなしくしていたのに！

「だから起きたばっかりで、服がなかったんです！」

私もさすがにむっとしますよ。理不尽です！ 素直に取り調べに協力したのにこの仕打ち！ 私も頭に血が上あって叫びます。

「何も持っていないのを確かめたかったらどうぞ！ あとは下着しか着けてませんっ。

面倒なら脱ぎますよ！」

「脱ぐな！」

脱ぐな、の部分は数人の合唱でした。私はビククリして、勢いを失います。

「え、あ、はい」

そこまで言われると、脱ぐのは止めるしかないですね。お見苦しいものを見せずに済んだようです。勢いをそがれちゃって、逆に落ち着いてきました。

「……何も持っていないかは、あらためて女性に確かめさせる。盗品も所持していない

な？」

「盗品品？」

どう見ても両手はからっぽなうえに、ペラペラな薄い服の私。何も隠せる場所はないよ！ 私の体形すら隠せていないからね！ ……お粗末さまです。隠したい乙女の秘密が包み隠さず公開されています。胸とか。

「私、何も盗んでいません」

両手を万歳して主張します。けど、それだけじゃ不十分だったみたい。

「人がいないのをいいことに、盗みを働く輩が多い」

ギロリと強面の偉い人が私を睨みます。火事場泥棒というヤツですね！ でもここに来るまで、誰にも会わなかったし、荒らされた部屋もなかったですよ。

「大丈夫です！ 人を探しているんな部屋を開けたけれど、変な人も荒らされた部屋もありませんでした！」

「お前が言うことじゃないだろう」

えー。

偉い人はてきばきと部下に指示を与えます。騎士様は七人いました。三人が、私が来た方向が荒らされていないかを調査する係、残りが私を連行する係になったようです。

私の背中の中はまだまだ下ろされていません。そろそろ下ろす指示をしてもいいと思うんですが。あんな重い剣をずっと持てるなんて、それだけで凄い。これがプロの技！

私はとりあえず両手に縄をかけられて、連行されることになりました。手錠とか手かせとかに慣れそうな自分が怖いんです。人のいるところへ行けるのはラッキーだけど、何が違う！ うん………とうとう容疑者になったようです。じ、人生何があるかわからないな。

「……そんな格好で寒くないのか」

「寒いです！ でも寒さっていうのがまた新鮮な感じがするので、これはこれでいいかなーって……」

偉そうな人は複雑な顔になりました。だって、幽霊状態や星原樹の時って、皮膚感覚がぼやけてたんだもん。久しぶりの感覚に興奮気味です。寒いけど。

「歩け」

背中を軽く押して促されます。

「はいっ」

私はおとなしく連行されます。ちなみにシーツは証拠品として押収されました。騎士様が畳んで持っています。服が欲しいなあ。どのみち、このままついていけば、人に会

えるのは確実です。もう不審な行動はとらないよ！ ぶっちゃけ、容疑が濃くなりますしね。でもちゃんとこうやって騎士様たちが星都を守っているんだなって思ったら安心します。なんでも前向きにとらえます。

また鼻がむずがゆくなって、くしゃみが出ました。それにしても、本当に寒い。シートも立派な防寒着でしたから。

私が震えていると、

「これを着なさい」

と言って、偉そうな人がマントを貸してくださいました。さすが騎士様、紳士ですね！ 結構分厚い素材で重いけど暖かいな。星都の紋章の刺繍が入っています。大事なマントっぽいので、ちゃんと洗ってお返ししますね。

連行されているけれど、不安はありません。だって悪いことを何もしていないから、大丈夫だとは思うんだ。問題は、私の身分証明ができないっていう点だけです。フフ……顔出しをせずに種子稼業をしていたツケが、こんなところにやってきましたよ！ でも顔出ししても、あまり変わらなかったかも。恐ろしいほど普通の顔ですから……。人ごみでまぎれる自信があります。姫様たちや王子様だったら、私のことをわかったださるかもしれないけど、絶対忙しそうだし、そんなロイヤルな方々には簡単に会えま

せん。誰か私を知らないですかー！ 身元証明してください。そう書いた看板を持って歩きたいぐらい。

騎士様たちの鎧が、歩きたびに金属音を立てます。私は微妙に浮いているから、足音がしません。

なんだかさっきまでの静けさがなくなったから、ちよっと安心します。ああ、人がいるなーって感じで。思ったより人に飢えていたのかな。しみじみと考えていた私に、不意に偉そうな人が質問をしてきました。

「お前、名前は何と言う？」

「あっ」

名前！ 聞かれてようやく気づきました。失念ってヤツですね。はつきりくつきりばかり忘れていました。嘘偽りを申し上げるつもりはありません。なので、胸を張って率直にお話します。

「私、名前がありません！」

正直に答えた私に、偉そうな人は言いました。

「で、名前はなんだ」

スルーですか。これにはさすがの私も困りました。「種子」だった私には、星別者コー

ドが振られていました。「星原樹」だった私には、物質コードが振られていました。

で、現状。神子だった私は、星原樹本体と一緒にになりました。でも、星原樹も再構築中で前のコードとは厳密に言えば違います。元々のものと新しく作られたものは違いますから。だから星別者コードの【O/M/V/W/K】も正確じゃない。確かにこの肉体には、星原樹と神子から引継いだ名前の名残が残っています。でも、今の私の本質をさす名前じゃない。新しい樹には、新しい名前が必要不可欠。でも今、神様は名前をつけられる状態ではありません。なら、四期の初めに瘴気にコードを振ったように、自分で名前をつけるしかないんだ。でも、すぐにしろと言われてできることじゃないし。

うんうん唸る私を見て、

「隠し立てすると、ろくなことにならないぞ」

と偉い人は言うんですが、残念ながらその隠すもの自体を無くしている状態ですよ！今は体型すら隠せてないぐらいだし！この際、あだ名でもつけてもらった方がよさそうです。

「名前がないので、適当につけてやってください」

「ないことなどあるか！名前が大事なものは、知っているだろう！」

怒られました。ごもつとも。

「知っています！でも、【O/M/V/W/K】は前の名前ですし、どの名前言ったらいいかわからないんですよー」

困ったなあ。頭を抱えて数歩進んだところで、誰の足音も聞こえないことに気がつきました。ん？振り返ると、騎士様たちが硬直していました。え、どうしたんですか！

「……私の耳がおかしいのでなければ」

偉そうな人が口の端っこをヒクヒクさせながら言います。

「星語で、神子様と聞こえたんだが」

なんでそんなに絶望したような顔しているんですか！なんだかすごく微妙な空気が漂っていますよ。息苦しいですね。空気が、妙に重いっ。

「はい、そうですが。その……」

騎士様たちの反応に私の方が戸惑います。ポカーンとする私をよそに、いきなり騎士様たちが跪きました。ひい！びびります。

「そうとは知らず、大変失礼しました。数々の非礼、お許しください」

偉そうな人が最上礼をとります。頭を深く下げられて、どうすればいいか謎なんです！何がどうなったんですかっ。

「失礼します。手を」

「は、はいっ」

「どういう意味かわからなかったもので、とりあえず偉そうな人の前に、ぐいっと両手を差し出しました。すると跪きながら、私の手を縛る縄をいじり始めました。縄を解いてくれるみたい。だけど、かなり固く結んでいたからなかなか解けなくて、結局小さなナイフで切ってくれました。どれだけ固結びなんですか。まさにロープ縛りの達人ですね！「ありがとうございます」

「お礼を言うと、ものすごく微妙な顔されました。そして再び跪いて口を開きます。

「全ては私の命により行われたこと。部下たちにはお咎めなきよう、伏してお願ひ申し上げます」

偉そうな人の言葉の後、しーんとしました。私も固まる、騎士様たちも固まる。

はっ。もしかして、これは私の言葉を待つ姿勢ですか！ 何を言えは……。演説などはできません。ましてや歌って踊ることもできませんよ。そんなことは誰も期待していないって？ 失礼しました。と、とりあえず率直に言うしかないかな。それが合っているかどうかは別として！

「その……騎士様は不審人物を捕らえただけで、悪いことは何もされていないかと思うんですが」

怖かったけれど、この人たちは仕事をしていただけだから、謝ることは全くありません。人を外見で判断しないのは重要だと思えますよ！ 前に売られそうになった時、犯人の中には少年もいたし。たとえ何もできなさそうな人でも、とりあえず人がいちゃいけないところを歩いていたら取り押さえるのって、間違えてはいないと思うんだよね。うん。私の場合は外見で判断されても仕方のない格好だったけど。シーツを巻いてネグリジェのまま部屋を出てはいけなくて、身に沁みました。前、勇者様に注意されましたよね。そんな格好で外に出るなって。勇者様、あの時言いたかったのはこういうことだったんですか。

私の言葉に、

「ありがとうございます」

「といい、偉そうな人は深く礼をしました。でも動こうとしません。困りました。

「その、皆さん普通にしてください」

「こういう場合の対応、誰かに聞いておけばよかった。神官様任せにしていたツケがここでやってきている感じです。

「ようやく張りつめていた空気が緩みました。

「では、お言葉に甘えて」

「そう言いながら皆さんが立ち上がりました。」

「神子様は、どちらへ行こうとなさっていたのですか？ お送りいたします」

厳密に言えば神子様じゃないけど、今はそれ以外で私を示すのに適当な言葉がなさそうだから、とりあえずその呼び名に応じようと思います。一番、みんなが知っている名前だしね。

「人がいる所へ行って、着替えを貸してもらおうかと思っていました」

まずは服ですよ！ 何より下着があればいいんですが……。特に上。胸が、その、胸がつ。

「そうですね……。では、城内の者が集まっている場所にご案内いたします。衣服は申し訳ないのですが、そこまでお待ちくださいませんか」

「あ、はい、こちらこそお願いします」

お手数をおかけします、と頭を下げます。その時、ルルちゃんのことを思い出しました。

「それと、その子、迷子みたいなんですけれど、お母さんが探していませんか？」

「では、お連れの方ではないのですか？」

みんなの視線が眠るルルちゃんに向きました。すやすやと気持ちよさそうに眠っています。たぶん、騎士さんの抱っこが上手なんだと思います。さすがに力持ちですね。私だったらそろそろ手がしびれて、下ろすかどうか悩んでいたと思います。

「さっきそこで泣いていたんです」

私がシートお化けと間違われて、怯えさせたことは黙っておこう。こうして忘れたたい記憶には、そっと蓋をするのですよ。

「子供がいるとすれば……。主神殿側でしょうか。あちらには一般市民が避難していますので」

避難、という言葉に私はビックリしました。

「皆さん避難してらんですか？」

「……神子様はご存じありませんでしたか？」

「ええと、色々あって、今まで意識不明でしたから、疎くて」

「それは失礼しました。お体は、大丈夫ですか？」

「あ、はい、今は全く問題ありません」

嘘は言っていないです！

この体は今の今までずーっと寝てましたし、元氣いっぱいです。ちょっとは現状を知っているけど、実は私は星原樹だから世界の情報を読みました、とか言い出したら、怪しさを爆発ですからね。

「今宵から明日にかけての間に、世界が減るといわれています」

偉そうな騎士様がそう言い、溜息を吐きました。そして私に向き直って、「時間がおしせまっていますので、歩きながらの説明でもよろしいですか？」

と礼節の授業で見たとおりの綺麗な礼をしました。おお、生で見えるお手本みたいな騎士の礼！

「あ、はい」

私が頷くと同時に、みんな歩き始めました。

偉そうな騎士様は改めて自己紹介をしてくれました。近衛師団の隊長さんだそうです。偉そうなだけじゃなかった、普通に偉かった！ マジメそうな強面の人です。迫力満点ですよ。これからちゃんと隊長さんって呼びますね！

「何からお話しすればいいのか……色々なことがありました」

隊長さんから聞いた話をまとめると、こうでした。

まず、空が急に曇りだし、星原樹が停止し太陽が出なくなっただので、各国の代表が星都に集まって会議をしたそうです。しかし、事態は解決せず、そのうち不思議な噂が流れ始めました。なんでも、魔物が溢れ出し、このままでは世界が減びるといいます。けれども各国上層部はそれを否定しました。しかし、どんどん噂の内容が深刻になり、だんだん魔物も増えていって、みんながおかしいと感じ始めた時、この国の王子様が真実

を発表して魔物との戦いを宣言したそうです。各国は主戦派と静観派に分かれています。主戦派が静観派を圧倒しました。いつのまにか整っていた食糧や武器の輸出入の仕組みのおかげで、立ちあがった民衆も武器を手にして、皆で戦おう……と各地で最後の決戦へと進んできたそうです。

そう、ここまででは私も漠然と知っています。世界に意識を広げて視ていました。

そして、その後、私が星原樹の後を継いで空の彼方にいた間の出来事を隊長さんが語ってくれます。

「現在各国で、神殿の主導により、魔物との決戦が行われていると思います。なんでも、出現する場所を予測した者がいたそうです。一応、ここからは離れています。万が一のために、戦闘能力の無い民を全員避難させているのです」

その言葉に、私は思わず足を止めました。それを不思議に思ったのか、騎士さんたちも足を止めます。

「……戦いは、もう始まっているのですか？」

私が最後に俯瞰図を見たのは、夜の始まりの頃でした。そして、まだ暗いから夜は明けてはいはず。私の質問に、隊長さんは沈痛な面持ちで答えてくれました。

「ええ、いまなお、各地で戦いが起こっています」

そして少し言葉を切って、

「勇者様も、大神官様も、出撃なさっています」

と言い添えました。たぶん、私に気を使ってくださったんだと思う。……無事に、二人とも帰ってきてくれるのかな。今、世界で何が起こっているのか、本当に一寸先は闇の状態です。目の前の廊下が闇に包まれて、先が見えない怖さにとても似ています。

戦いは、続いている。でも瘴気が世界を覆うことなく、謎の霧だけが満ちている。一体、世界に何が起こっているんだらう。急にドキドキとうるさくなつた心臓を、手で押さえます。

私の表情に気づいた隊長さんが、更に教えてくれました。

「そうですね、勇者様を心配なさるお気持ちにはわかります。よく神子様を見舞われていたとお伺いしましたよ」

周りの騎士さんたちも頷いています。お見舞い……お忙しかったらうに、すみません！ しかも、肝心の私は、体にいませんでしたし。それを考えたら更に申し訳ないですわね！

「そうですね……」

結局、お二人に会えませんでした。隊長さんが何故か言いにくそうに続けます。

「……お二人は、親しくなさっていたとお伺いしましたが」

「はい、仲良くしていただきました。突っ込みさせてもらう程度には」

「……突っ込みですか？」

「はい！ 突っ込みです」

「それはどういう基準ですか？」

微妙な表情を隠さず、隊長さんが私に聞きます。

「やっぱり親しくならなきゃ、変なことをしていても突っ込みませんよね。最近ようや、遠慮なしに突っ込めるようになったんです！」

隊長さんが微妙な眼差しで私を見ます。そして無言で目をそらしました。今の、訊かなければよかった、みたいなのは何ですか。勇者様は、他の人相手でしたらあんな無愛想無表情かつ短文区切り喋りではありません。だからみんなはわからないんですよ。

普段は突っ込みするにも、ひと苦労な人なんです。それが突っ込みできるほどになったのを、私は誇りたいです！ でもこれを説明するのはどうにも難しいんですよ。勇者様の対外スキルの高さはとんでもないですしね。対外スキルだけは……

すると後ろを歩いていた騎士さんが、ほそほそと、
「では噂は……」

と何かを話そうとします。何の噂ですか？ 私が振り返る前に、隊長さんが咳払いを

すると、声が止まりました。隊長さんは、やや強引に話題を戻しました。

「ともかく、仲がよろしかったんですね」

私は曖昧に返事をしてまた無言で歩き出しました。でも噂ってなんだろう。

「隊長さん、噂ってなんですか？」

隊長さんは無言でした。しばらく間があいて、

「勇者様と神子様は、実は兄妹だったとか」

とおっしゃいました。なにか言葉を選んだ雰囲気がありましたけど。

「違いますよ。血のつながりはありません」

勇者様の妹である私……まず、想像できません。勇者様は意外と世話焼きだから、妹さんがいたら甘やかしそうだけどね。でも一体どこからそんな噂が。謎です。

星原樹は始原とであれば、ある意味姉弟です。始原の情報を得て彼の姉に似た見た目を作っていましたから。でもそのことは誰も知らないから、そっちの話じゃないのはわかりません。

会話を尽きましたので、おとなしく歩いています。というより隊長さんがそれ以上聞くなどというオーラを出しているの口をつぐみましたよ。空気を読んでみました。

夜明けまでの残り時間はどれくらいだろう？ ぶっちゃけ、時間を気にしない生活が

長かったから、時間感覚が麻痺しています。前は、腹時計の正確さが陸馬さん並だったのにね！ 日々の鍛錬つて、重要なだね。そういえば何も食べてないなあ。でもお腹が空いてません。星別者、燃費良すぎです。

戦いはどうなっているんでしょう。勇者様も神官様も、戦場にいるとさつき聞きました。星原樹の知識からすると、勇者様の災害指定規模はかなり強いのです。無意識にこの人が制御しているせいで、世間的にはちよつと強いぐらいになっているけど。本来の力を使えば、怪力とか星術がすごいというレベルじゃないんだ。あらゆるものを壊す力を勇者様は持っています。文字通り、全部。たぶん星原樹も目じゃないですよ！ ただし、対価に存在値、つまり自分の命が必要だから、世界を壊しきる前に勇者様が力尽きるとは思います。だから、勇者様が手に負いかねる魔物だったら、世界の方がどうにかなくてしまおうと思います。そんな凄い魔物なんて、そうそう出ないよね？ だから、お二人は大丈夫なはず。そう考えて、自分に言い聞かせます。

その時、小さな声がありました。

「お母さん……？」

ルルちゃん起きたようです。目を擦りながら、自分を抱っこしている人を見上げます。そして知らない騎士さんに抱っこされているのに気づいて、硬直しました。よっぽ

どビツクリしたのでしよう。一気に顔が崩れちゃいました。

「ふえ……う、うわあああん！」

じわつと涙がたまつたと思つたら、大きな声で泣き出しました。私は慌ててルルちゃんのところに行きます。騎士さんからルルちゃんを受け取ると、彼女は私に強く抱きつきました。

「大丈夫、お母さんのところへ行く途中だよ」

なかなか泣き止んでくれません。う、困った。隊長さんも困っている様子。

「先にこの子を送って行って、いいですか？」

お母さんも心配してると思いますし。ルルちゃんをあやししながら隊長さんに提案してみると、

「神子様みこがよろしければ」

とお返事をもらいました。よかった！ 一般の人がいる方へ、道を変えて歩きます。

ルルちゃんは泣きやみません。悲しそうな声を聞いて、私は少しだけルルちゃんを抱く腕に力を込めました。でもルルちゃんが抱っこしてほしいのは、私じゃなくてお母さんなんだよね。

「ルルちゃん、もうすぐお母さんの所へ行くよ、大丈夫」

「ほんとう？ もう、お母さんに会える？」

ルルちゃんの顔は涙でべちょべちょになっていました。私はその頬に頬を寄せて、話しかけます。

「大丈夫だよ」

「でも、もう朝が来ないってみんなが言ってた！ みんな死んじゃうんだって。私も、死んじゃうんだ！」

ルルちゃんの声は決して大きくはありませんでした。けれど、その内容に騎士さんたちが息を呑んだのがわかります。

「死なないよ」

「ベルチェもバレリーも言ってたもん！ うそじゃないもん！」

ルルちゃんは泣きながら言いました。そして余計に悲しくなったのか、しゃくり上げながら苦しそうに涙を流します。さつき挙げたのはお友達の名前かな？ 隊長さんが若い顔でこちらを見えています。星別者せいべつしやに名前を知られることの意味を、知っているみたい。大丈夫です、私は名前を覚ええない、覚えられない欠陥星別者ですから。

「じゃあ、私が朝を見せてあげる」

「うそだ！」

「嘘じゃないよ」

ルルちゃんをゆっくりと揺らしながら、一生懸命語りかけます。星原樹として空の中にいた私には実感がなければ、みんなは何日も太陽を見ていないのです。だからこそ、不安になるんだと思う。しかも今夜は、星の加護もない本当の暗闇です。私たちの会話を、騎士さんたちも真剣に聞いています。それだけ心に不安を抱いているのでしょうか。

ふと、私はあることを思いつきました。

歌でイメージを伝えられるかな？ 星原樹はもともと樹だから、空気を震わせることで声を伝えるんじゃないかと、思念で会話するのが本来の形なのです。そのことを種子だった私もちよつと覚えてたから、誘拐された時さるぐつわのまま始原と会話できたんだよね。始原が聞いてくれたっていうのもあるけど。今は星原樹も粒子になって空気中にあるから、それを通して思念を伝えることができるかもしれない。

「ルルちゃんに、夜明けを見せてあげる」

本格的な幻惑の星術ではなく、少しだけ知覚に訴えかける優しい幻想を描けたら。

私は息を吸い、歌い始めました。

「y0xxxk*n0yvvr0 w0 shvvvt*rww?」

――夜明けの色を知ってる？

「夜明けの、色。」

ルルちゃんはきよとんと顔を上げます。ちゃんと星語の意味を、星原樹で中継して伝えることができたみたい。星語は世界に呼びかける言葉だから、それで話しかけると必ず心に届くのです。ちよつとした裏技ですよ。騎士さんたちは、星語がわかる、とかなり驚いています。

私は声を出さずに、思念で言葉を綴ります。

勇者様の持つ蒼は、本当は夜明けの色なんだよ。見て！

「txxxxvvy0w w n0kvvvn y0z0rxxxn0k0nn yw w m*gxxx10k*lxxxxxxvxxxxvvvvv
vr0n0hvvvh*vvv*vnm」

――太陽の金 夜空の紺 夢が溶けた淡い色の地平線

私が幻想で描いたのは、吸い込まれそうな黒い夜空でした。

幻想の暗闇でも怖かったのか、ルルちゃんは体を強張らせました。その背中をとんとんと叩きながら、幻を描く筆を進めます。

その間に、うつすらとした白い線が現れます。まだ地平線の向こうで眠る太陽が、優しく光の腕で夜をかき分けていきます。地平線はやがて赤く燃えるように輝き、まばゆい光点が朝の訪れを叫びます。光が闇を切り裂く瞬間！

太陽だ！

誰が零した言葉かはわかりません。とても喜びと安心に満ちた声でした。誰に幻を見せるか制限せずに歌ったから、音の届く範囲の人全員に見えています。逆に、その人たちの心の声も、拾っちゃっているのかも。

太陽が空に姿を現すと、夜はその長い裳裾を引いて、ゆつくりと反対側の空へ退場していきます。それが朝と夜の混じり合う時刻——夜明け。

安心する。

誰かが言いました。あれ？ 今のは女の人の声でした。私は幻を描く筆から僅かに意識を戻します。

いつの間にか、神殿のみんなが避難している場所に来ていたみたいです。扉を開けて覗いている人たちがいます。その向こうの大きな部屋にも不安に震える人の意識が感じられます。その人たちも幻に巻き込んでいたみたい。幻想を見た人の心が、少し軽くなっているのを感じました。そして、その光に希望を見た人たちの周りで、霧がうつつすらと光を放ちます。

みんなの不安を取り除きたいな。そう思って、私は言葉を重ねます。

「y0rw w hxxx k0wxxxxvvvxxxmrvvd*hxxxxxxkxw yw w m*d*xxxs0bw

w txxxm*0jvvvxxxxm」

——夜は闇ではなく、夢で遊ぶための時間

楽しいことや好きなことを考えたら、闇も怖くないんだよ。笑いながら思念で話しかけました。ルルちゃんは、

「お姉ちゃんの楽しいことって何？」

と私と普通に話します。私の思念の声に慣れてきたみたい。逆に大人たちの方ほうが戸惑っていました。ルルちゃんと会話する傍ら少しずつ術の範囲を広げて、現実の闇を柔らかい幻にすり替えていきます。

闇は怖くない。眠りにつく優しい時間です。夢の中も怖くない。楽しいもので溢れる、想像力で遊ぶ時間なんですよ！

ルルちゃんの楽しいことってなあに？

その問いかけに、ルルちゃんは友達と遊ぶ風景やお母さんのビーフシチューを挙げていきます。それを星原樹が上手に中継をして、みんなに幻視をさせます。確かにおいしいようなシチューですね！ とろけるような茶色、やわらかお肉！ 最高だよね！ 私はお返しに、パン屋で食べた焼きたてのパンや、陸馬さんのもふもふな手触りを投影しました。楽しくなって笑い合えば、ふわふわと霧の光が舞い散ります。好きなものをどん

どん挙げると、幻を描く筆も進化します。やがて闇の中に光の花が咲き、ネズミがダンスをして、人形のお姫様がくるくる回りだしました。楽しい劇場のような、素敵な夢の風景です。

めまぐるしく変わる幻に驚いているものの、人々の心が不安や恐怖から離れていくのを感じました。

その時、ルルちゃんが、遠目で見た勇者様を思い浮かべました。不意打ちで見た久しぶりのその姿に、私はビックリします。ルルちゃんから見た勇者様だから、あの勇者スマイルを浮かべていて余計にビックリしましたよ！でも、それも一瞬で、胸の奥で心配がむくりと頭をもたげました。その感情が、ちよっぴりルルちゃんに漏れちゃったみたい。ルルちゃんは首を傾げながら、私に問いかけました。

「おねえちゃんは、勇者様が心配？」

うん、そうだね。

「すき？」

女の子らしい質問に、私は笑いました。好きだよ。でも、神官様も、パン屋のおかみさんも、姫様やルルちゃんも、笑顔を交わした人はみんな好き。

星原樹も、神子も、この世界が大好きです！

苦しいことも、悲しいことも、辛いことも、全部ひっくるめてこの世界にあるもの全部！

私は笑って宣言しました。

全部好きだよ！

ルルちゃんと顔をあわせて笑いあいます。これもささやかなしあわせ。誰かと笑える楽しさ。私たちの浮き立つ心を反映して、不思議な力が光を増していきます。

その時、人々の間から女の人がぱっと飛び出してきました。

「テルル！」

ルルちゃんのお母さんです。ルルちゃんをそっと下ろすと、一番素敵な笑顔でお母さんに抱きつきました。喜びの心が、また光になってぱっと散ります。

ようやくこれの正体がわかりました。

これは、人の心の欠片。瘴気のように人から零れた心の力です。いや、もっと正確に言えば瘴気から負の感情が抜かれた、力だけがここにあるんだ！

人の心の一部を物質化して瘴気としてコードを振ったのが、四期の初め。星原樹は、心の欠片を世界に止めるように、世界を変えました。

瘴気を集める術。そして、その瘴気から負の感情だけを抜き去り、ただの力として還

元している術が、どこかで行使されているのに、その本体——始原はやっぱり私には見つけることができせん。彼は、どこで何をしているんだらう。じわっと焦りが浮かびます。

これが瘴気でないのなら、そして、核を持たない力なら、方向性を与えてやればいいんです。瘴気のように苦しい気持ちから生まれるものじゃなくて、温かい気持ちに反応するものなら、その感情をここから広めれば、世界に良い影響を与えることができるかもしれません。

私は顔を上げました。呆然とする人たちに呼びかけます。

しあわせについて語りましょう！

「mvvnmxxxhxxnxxxxnvvgxxxxwwkvvvd'swkkxxx?」

——みんなは何が好きですか？

私の呼びかけに、戸惑う人々。けれど、やがて初めに一人の女の人が手を上げました。——私のしあわせは、二度寝すること！

私はお姉さんの想像を中継してふんわりと膨らませました。お姉さんは、ベッドの温かさについて描きます。光に乗って、お姉さんの描くしあわせの形がみんなに共有されます。

朝、目が覚めた時に布団が吸っている自分の温もり。そのふんわりした温かさに包まれてまどろむしあわせ。頬に当たるシートが、洗い立てだったらもうれしい！ お日様の匂いと石鹸の匂いが、ふんわりと香りたちます。それだけでいい夢が見られそう。な、素敵な時間。

それをお姉さんが語ると、「でも遅刻は駄目」と隣の友達が笑いかけます。思わぬ突っ込みに首をすくめるお姉さんに、「早起きもいいよ！」と違うおばあさんが言います。

新鮮な朝の空気の気持ちよさ。ほんのり混じる湿った草の香り。おばあさんは農家の方の方です。広い草原に満ちるみずみずしい青草の香りを、みんなが感じました。それを胸いっぱい吸って、朝が始まる。心地よさ！

「すてきね」と星都に住んでいる貴族のお嬢様が呟きました。「下々の生活なんて思っていたけれど、とてもすてきね」。お嬢様に、おばあさんが笑いかけます。「そうさ、田舎も捨てたもんじゃないよ！」お嬢様は恥ずかしそうにうつむきました。

次は誰かな。上がったのは、はじけるような声。

「ブラウンさんの笑顔！」真っ赤になりながら言い切ったのは、なんと騎士さんの一人です。ブラウンさんと呼ばれた女の子が、真っ赤になりながら「わたしも好きです！」と反射的に叫びました。騎士様がさらに赤くなりました。思わぬところで恋の花が咲き

そうです。みんな口々に祝福をしました。

みんなにとって素晴らしいもの。それがどんどん挙げられて、ふわふわとした光が広がっていきます。それは誰もが持っている、自分だけの大切なものたち。

恋人の笑顔、ろうそくの光、ちよっと汚れたけど大事な靴下、昨日食べたスープ、昔友達にもらったボール。続きが来なかった手紙忘れていた思い出、家族の団欒の時……他人にとってはなんでもないことかもしれないけれど、その人にとっては何物にもかえがたい、しあわせの形たち。光は人々の喜びや幸福に反応して、どんどん強くなっていく。

この光と星原樹の補助の影響で、人々の意識が触れ合っています。イメージが簡単に共有されているのはそのせいなんだ。肉体による個の垣根と心の壁が薄くなり、直接魂で交感しているのだと、星原樹が分析しました。

ただ、みんなが上手くしあわせを描けるわけじゃない。

中には、人の不幸が自分のしあわせだと言い張る人もいました。でも、その人はしあわせそうな顔をしていませんでした。おじいさんがその人に「わしが話を聞こう」と告げると、その人は次々に悲しいイメージを出しました。たぶん、その人が今まで体験したことだと思えます。辛い過去を全部聞いて、おじいさんは最後にぼつんと「あんたは

頑張った」とだけ言いました。その人はうつむいて、涙を流し始めました。言っただけ言った言葉なんだろうな。

魔物にまだ怯えている人もいます。

どうしても捨てきれない憎しみをいなく人もいます。

何もかもに怒っている人もいました。

むき出しになった魂は嘘を吐くことができず、ありのままの自分を表します。

それでも、耳を塞ぐことができなないこの場所で、否応なしに飛び込んでくる言葉や、心揺さぶられる風景に、だんだんみんなの心が変化していきます。今まで知らなかった人同士が、不思議と重なり合い、触れ合い、また違う物語を紡ぎだすのです。そこに生まれた新しい音色に、また私は違う響きの韻律を乗せました。

変わっていくこと。

それが星神様が人に望んだ性質です。今、めまぐるしく変化していく人々に、私はそのことを思い出しました。

人々から生まれた暗い心が痺気だとするなら、同じように心から生まれた明るい光はなんと言うべきなんだろう。

もしかしたら、この方法で闇を払うことができるかもしれません。